



「ひらほく新聞」で検索！
★ホームページ・ひらほくランド★
http://www.hirahoku.com/
☆バックナンバー含め「ひらほく新聞」を
閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

恩を知り 恩に報いる



愛読誌、人間学を学ぶ月刊誌『致知』9月号の特集は「恩を知り 恩に報いる」でした。あらためて学ぶべき『知恩報恩』の大切な教えを抜萃、ご紹介します。

「人間は一人で大きくなったのではない。会社もまた、一人で大きくなったのではない。慌ただしい日々の中にも、ときを過去を振り返って、世と人の多くの恵みに感謝する心をお互いに持ちたい。

その心こそが、明日の歩みの真の力になるだろう」

松下幸之助氏の一文である。十歳で丁稚奉公となり、様々な試練を経ながら大を成した人の言葉には、胸を打つ響きがある。『知恩報恩』の大事さを改めて教えてくれる言葉である。

忘恩の徒となる非を先哲は強く戒めている。弘法大師空海もいう。恩を忘れるれば善根断絶す、と。恩を忘れると、将来に善きことをもたらす根が枯れてしまう、というのである。心したいことである。

先日、台湾に行き、戦前に日本の教育を受けた何人かの台湾人から話を聞く機会を得、深い感動を覚えた。

台湾はオランダをはじめ、様々な国によって統治された三百年の歴史を持つ。中でも五十年にわたる日本の統治が台湾に及ぼした影響の大きさについて、誰もが熱く語った。治安も衛生状態も悪かったかつての台湾を近代化に導き、今日の台湾の基礎を築いたのは日本人である、と。

子供時代に日本統治下で日本人として育ち、その教育を受けたことによって、いまの自分がある。日本に感謝しなくてどうしよう、と彼らは柔らかな笑顔とともに異口同音に答えた。

事実、統治時代に台湾のために粉骨砕身した日本人は数多い。中でも特質すべきは烏山頭ダムを造った八田與一である。

台湾最大の嘉南平野は、旱魃と洪水と塩害の三重苦に喘ぐ不毛の草原でしかなかった。六十万の住民は飲み水にも事欠いていた。

台湾総督府の土木技手となった八田は、水源確保のため貯水量一億五千万トンのダムを造り、一万六千キロメートルに及ぶ給排水路を巡らせて嘉南平野全域を潤す計画を立てる。

この時、八田三十二歳。しかし、五十余名の死者を出す爆発事故もあり、工事は困難を極めた。だが、八田はひるまない。そして、着工から十年、昭和五年に工事は遂に完成した。五月十五日に通水式が行われ、烏山頭ダムから全分水路に水が行き渡るのに実に三日を要したという。十五万ヘクタールの大地を潤す水を目にした嘉南の農民は、「神の恵みの水」と歓声をあげた。その八田は、昭和十七年、軍の仕事でフィリピンに向かう途中、米海軍の魚雷を受け死亡する。享年五十六だった。

烏山頭ダムを見下ろす丘の上に八田の銅像と墓がある。台湾ではいまも五月八日の八田の命日に追悼式が催される。台湾の人々は八十年以上経つたいまも、八田の恩を忘れていない。

先の東日本大震災では、台湾から総額二百億円を超す世界最高額の民間義援金が寄せられた。今回の熊本地震でも台湾からの義援金が世界最高と聞く。八十余年前の恩に忘れずに報いようとする台湾の人々の心が

痛いように伝わってくる。人口僅か二千三百万人の国が活力、バイタリティーに溢れている。そのことと知恩報恩の民族の精神とは決して無縁ではない。

恩を知り恩に報いようとする心の連鎖は、個人の運命のみならず、民族の運命をも高める。そのことを教えられた台湾の旅である。

(終わり)

この台湾のお話は、大好きな博多の歴史・白駒妃登美さんの講演会での話として、以前2013年、ご紹介しました。

その白駒さんが今回、「歴史に学ぶ感謝報恩に生きる偉人の物語」というタイトルで『致知』の特集に寄稿されていました。

感謝報恩の生きた方

医学者として素晴らしい実績を残した北里柴三郎ですが、実は他にも後世に生きる私たちに残してくれたものがあります。それは柴三郎の美しい生き方であって、これこそ私たち日本人が語り継いでいくべきものだと思ふのです。

留学生として大輪の花を咲かせて帰国した柴三郎を待っていたのは、内務省衛生局に復職することすらできず、失職の憂き目に遭うという厳しい現実でした。

その窮状を救った人物がいました。福沢諭吉です。諭吉は柴三郎の高潔な人柄や崇高な志に胸を打たれ、芝公園内の所有地に私財を投じて伝染病研究所を建設したのでした。さらに柴三郎自身が新しい研究所の建設をしようとした際にも、反対運動を沈静化。柴三郎にとって諭吉への恩は終生忘れ難いものとなりました。

ここで時代を遡って、福沢諭吉がなぜ前述のような生き方ができたのかについて思いを馳せると、幕臣・木村摂津守の存在に行き当たります。

彼は中津藩の下級武士にすぎなかつた諭吉を、いわゆる私設秘書として採用すると、遣米使節団を乗せた咸臨丸に乗船させたのです。これが諭吉の人生を開く大きなきっかけとなりました。それだけに、諭吉はこの恩を深く心に刻み込んだのです。

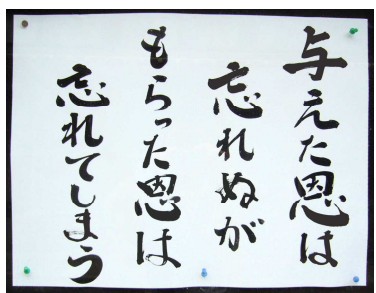
後に三十代にして職を失い、困難な状況に陥った木村摂津守に、諭吉は生活費を送り、また海軍に入った木村摂津守の息子にも生涯お金を送り続けたのです。

私は、「恩に報いる」とは、その本人に恩を返すことであり、さらに他の誰かにもその恩を送ることだと思ひます。福沢諭吉が木村摂津守から受けた恩を北里柴三郎に送ったように、柴三郎もまた諭吉から受けた恩を、赤痢菌を発見した志賀潔や世界的な医学者となった野口英世など、次の世代に送っているのです。

まるで人間の体内を血液がぐるぐる回るように、日本列島をたくさん恩が巡っていく。日本とは、なんと会いに溢れた素晴らしい国なのでしょう。

日本人が古来最も大切にしてきたもの、それが恩です。日本人のことを「感謝の民族」という方もいますが、感謝が気持ちだけにどまることが多いのに対し、恩を感じたら、その恩を返そうとか、誰かに送ろうとするなど、必ず行動になって現れます。ですから、恩を感じるセンサーを育てることが、日本人の遺伝子にスイッチオンにする一番の原動力になるのではないかと、私は思ふのです。(終)

恩を知り 恩に報いる
それは おかげさまと
心に刻み できることで
生涯 恩返し すること
そして 次の誰かへ
恩送り していくこと



与えた恩は

忘れぬが

もらった恩は

忘れてしまう

2006年の秋、島根県の温泉津(ゆのつ)温泉を訪れ宿泊した翌朝、師匠と熱い源泉に入りに出かけた折り、近くのお寺さんでこの筆文字の掲示板が目にとまりました。さすが(笑)

いつもの通り持っていたデジタルカメラでパチリと撮影。旅から帰ると、師匠があ

の掲示板の言葉について詳しく調べてみるとのこと。

さっそく宿泊先の女将に電話で聞くと、西楽寺さんというお寺さんで、住職さんはブログなどホームページもやっているとても素晴らしい方だと分かりました。

すぐにメールで挨拶を入れるとほとんどなく、「現在出先なので帰ったらブログに書きます」と丁寧なご返事。

2度にわたってブログで取りあげてくれた、その時のお話が・・・

ほんとうの優しさとは

とても深いお話でしたので、『恩』つながりでここにご紹介いたします。

「ほんとうの優しさ」
2006年9月23日

へソ曲がりな僕は、ベストセラーと名がついた本は、みんなが読んでいるのなら、やめよう…と買わないことにしている。

ところが、そんな僕が、たまたま読んだベストセラー、島田洋七著の「佐賀のばばいばあちゃん」。

その中に、昭和三十年代の運動会の日のできごとがあった。当時の運動会といえば、重箱にご馳走を詰めて家中が駆けつける華やかで特別な日だった。だけど、せつかくの運動会でも洋七の家族は誰も来ない。

弁当はいつもと同じ梅干と生姜だけが入ったもの。事情を知っている友だちは、自分の家族といっしょにご馳走を食べようと誘うけれど、洋七はそれを断って、賑やかな校庭を避けて教室で一人で弁当を食べようとしていた。

そこへ担任の先生がやってきて「自分はお腹が痛いので、おまえの梅干の弁当と替えてくれ」という。

そして、先生の弁当と交換した洋七は、今まで食べたこともないようなエビフライやウィンナーの入ったおいしい弁当を食べることができた。

その次の年も、担任が変

わったそのまた次の年の運動会でも担任は「お腹がいたくなった」と言って来ては、洋七の梅干弁当と先生の豪華なお弁当と交換することを言ってきた。

この学校の先生は 毎年運動会になるとお腹が痛くなるんだなと思っていた洋七に、おばあちゃんが言った言葉が…

『本当の優しさとは、

他人に気づかれずにやること』

もしも、かわいそうだから、気の毒だから…という同情や哀れみが先生の中に

見えたら、もう洋七は食べなかつただろう。

だが、担任の思いは、親と別れていつも貧しい暮らしで粗末な弁当を食べる洋七に「せめて 年に一度」美味しいものを食べさせた

い…。それだけだ。だから、わざとお腹が痛いふりをして、その思いやりが洋七に分からないようにして洋七にご馳走を食べさせた。洋七が先生の思いやりに気づいて、喜んで、お礼を言ったりすることは

求めていない。洋七にご馳走の弁当を食べさせることができた…。それだけでもう満足なのだ。

「本当の優しさとは他人に気づかれずにやること」

ということとは、相手に分かる(気づかれる)ような優しさはホンモノじゃないってことか。

家族や周りの人にちょっと親切や優しさを届けると、「早く気づいて 御礼を言つてほしい…」

そうなるように思ってしまう自分が恥ずかしくなった。

「本当の優しさとは他人に気づかれずにやること」

この「優しさ」ということとは、「思いやり」「願い」と言い替えてもいいだろう。

それが、相手に気づかれないように届けられているということは自分は今、自分で気づかないままに大きな願いや思いやりの中にすでに包まれていた…ということだろう。

仏さまの真実の慈悲心や親のまごころも同じだ。この私には気づかれないように届けられている…。

そのことに気づかせていただくこと。それが仏法を聴聞していくことだろう。

「ほんとうの優しさ

(その2)」

2006年9月24日

昨日ブログで採り上げた「本当の優しさとは他人に気づかれずにやること」

この言葉をもう一度考えてみた。

自分はどうだろう？ 家族や周りの人に、ちょっと優しさ(親切)を届け

たら、その途端に、早く気がついてくれないかな。と相手は気づくの期待して待ち始める。

そして、なかなか、気づかなかつたら、相手が気づくような状況を作りだす。

ただし、これは相手に気づかれないように、さりげなく行う。(矛盾)

それでも、気づかなければ、もう待ちきれない！

「***しておいたからね」と、届けた親切を相手に直訴してしまう。

それで気づいたなら、今度はその親切をよごこんでほしい。その上で「有難う」とお礼の言葉を言ってもらつて、やっと満足するのだ。

だが、…どうだろう。いくら優しさ(親切)を届けても、相手がそれに「気づいて・喜んで・感謝する」ことを求め・押し付けていたなら、一生満足できることはないのかも。

洋七の先生のように、相手に届けることができたから、その時点で親切が「完結」すれば、そこでもう「よかった」と満足できる。

気づく・気づかない、喜ぶ・喜ばないのは、相手の問題。自分はその親切ができたことを喜べばいい。

ここまで書いてきたら、先日まで門前の掲示板に掲げていた言葉を思い出した。

「与えた恩は忘れぬが もらった恩は 忘れてしまう」

(終わり)

「恩」を「優しさ」に替えたら、そのまま味わうことができます。

相手に気づかれないように、さりげなく行う… 施して、語らず…

「ほんとうの優しさ」

素晴らしいです！

編集後記

「恩」の字は、上の「因」と下の「心」からできているが、因とはもと、原因とかいうことで、恩とはものごとのもと、ことに自らの今日の姿のものを知って、これをありがたく思うことである。(平澤興「一日一言」致知出版社)

まさにその通りであると「恩」を感じた8月でした。若き特攻隊員たちは命懸けで最後までこの国を守った。そして広島・長崎の被爆、終戦。犠牲となった尊い多くの命…、そしてこんなにも便利で平和な現代を生きている私たちの命…。

私の祖父は父が十歳の時に戦死したと聞きました。お盆のお墓参り。合掌して伝える祈りは、「ご先祖様のおかげさま」。そう、私たちは決して一人で生きて

いるのではなく、大自然やたくさんの人との縁によって、この「いま」を有難く生かされている。「恩を知る」とは、まさに「おかげさま」を知ること。

胸に迫るドラマの数々、熱い闘いが幕を閉じたりオ五輪。メダルの有無、色に関係なく、歡喜の言葉はご家族や応援者への感謝。特に『恩師のおかげ』でという言葉。親子以上の厚い信頼は、有難く「恩送り」されていくことでしよう。

与えた恩は忘れぬが もらった恩は忘れてしまう

戒めとして、常に心に留めておきたい言葉です。